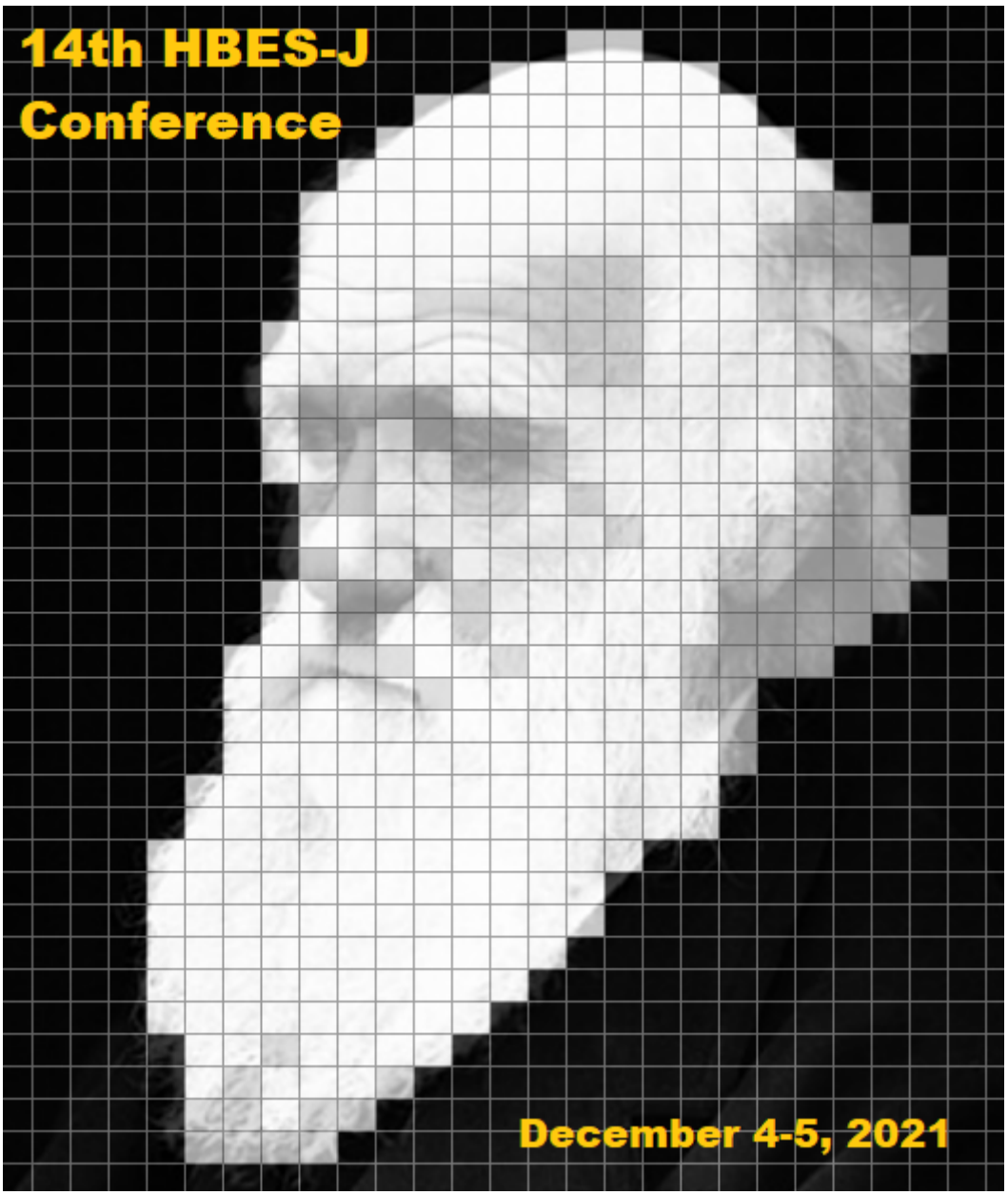


日本人間行動進化学会

第14回大会

オンライン開催

2021年12月4日（土）- 12月5日（日）

Table of Contents

Table of Contents 1

OVERVIEW 3
- 大会サイト 3
- 参加について 3
- Events 3
- Gather.townについて 3
- Gather 会場フロアプラン 4
- 若手発表賞について 5
- 大会運営メンバー 5

INVITED TALK 6
- 12月4日（土） 13:00-14:00 6
- ゲノミクス時代の文化進化 6

POSTERS 6
- **Session 1：12月4日（土） 14:30 ～ 16:00** 7
  - 多数派同調は、協力の進化を促進するか—2つの規範が協力の進化にもたらす影響についての検討— ☆ 7
  - 多数派への過剰な同調: 多数派同調バイアスの実験的検討 ☆ 8
  - 他者は自分よりも道徳的か、それとも非道徳的か？：道徳基盤を用いた検討 ☆ 9
  - コミュニケーションは言語構造の文化進化に寄与するのか？：繰り返し学習実験による検討 ☆ 10
  - 説明責任は制御幻想を弱めるのか？ ☆ 11
  - 直観的協力の生起メカニズムに関する検討：安心ゲームへの主観的な構造変換は集団内に限定されるか？（研究計画） ☆ 12
  - 意図の伝達を考慮した義憤の適応性（研究計画） ☆ 13
  - 加害意図がなければコストのかからない謝罪でも赦してもらえるのか？ 14
  - 大きいグループにおける協力行動の存在はopt outで説明可能である 15
  - 新奇物への探索傾向は見知らぬ他者との社会関係構築を予測するか？：ラットにおける探索的分析 16
  - 恋愛・結婚・出生・子育ての四段階と少子化：現代日本における結婚の意義に注目した二次分析（研究計画） 17
- **Session 2：12月5日（日） 13:00 ～ 14:30** 18
  - サイコパシーの協力は互恵性の期待で引き起こされるか？ ☆ 18
  - 脳の中に「自他の重ね合わせ」は存在するか：哲学と認知神経科学の学際的アプローチ ☆ 19
  - 向社会行動における背外側前頭前野の役割：思春期世代を対象にした検討 ☆ 20
  - AIICの存在は、普遍主義均衡・集団主義均衡の安定性に影響を与えるのか？ ☆ 21
  - The evolution of cooperation in the generalized linear division of labor ☆ 22
  - ネットワーク上の文化伝達モデルによる日本語アクセント様式の変異率・系統関係の推定（研究計画） ☆ 23
  - 文化的自己観は性格特性の自己高揚/卑下に影響するか？：プライミングによる検討 ☆ 24

文化的自己観は性格特性の自己高揚/卑下に影響するか？：個人差による検討 25
集団選択と社会選択の相互作用による利他性の進化 26
罰行使者はいつ好かれるか？非協力者の動機とゲーム状況に関する検討 27
イヌやネコはヒトの子どもをどのように認識しているのか？質問紙調査による検討（研究計画） 28
Session 3：12月5日（日） 14:30 ～ 16:00 29
COVID-19ワクチン接種の促進・阻害要因 -第5波下におけるデータからの検討- ☆ 29
若年成人期のリスク傾向と中年期の社会的成功との関係：生活史理論の前提の再検討 ☆ 30
出生体重が初経年齢に及ぼす影響：ストレス応答性を考慮して ☆ 31
睡眠不足が創造性に与える影響の検討 ☆ 32
新たなシグナルが人間社会に普及する過程の実証的検討-飲食店の新型コロナ対策ステッカー制度を例にとって- ☆ 33
罰権力集中が協力形成に及ぼす負の効果の検討 34
集団に有益な戦略の文化進化：文化的集団淘汰の実験的検討 35
自己統制資源の消耗が向社会的・向自己的な人の利他行動に及ぼす影響 36
初期ヒト集団の「法の機能と進化史」：コンピュータ・シミュレーションによる解明（研究計画） 37
同情の強さと返報可能性の手がかり：助けるに値するのは誰か？（研究計画） 38
フィールドでの遺伝子サンプリングのための予備調査—Serial monogamyがみられるボツワナの母系居住集団を対象に—(研究計画) 39

OVERVIEW

大会サイト

https://sites.google.com/hbesj.org/hbes-j2021online

参加について

HBES-J会員（正会員、学生会員、準会員、賛助会員）のみ参加可。参加費は無料です。

Events

1日目

12月4日（土）12:30 - 13:00	開会宣言・総会	@Gather 総会・講演会場（Zoom）
12月4日（土）13:00 - 14:00	招待講演	@Gather 総会・講演会場（Zoom）
12月4日（土）14:30 - 16:00	ポスターセッション1	@Gather ポスター会場

2日目

12月5日（日）13:00 - 14:30	ポスターセッション2	@Gather ポスター会場
12月5日（日）14:30 - 16:00	ポスターセッション3	@Gather ポスター会場
12月5日（日）16:00 - 16:30	表彰＆閉会の辞	@Gather 総会・講演会場（Zoom）

学会運営関係

12月4日（土）10:00 - 11:00	LEBS編集委員会	@Zoom
12月4日（土）11:00 - 12:00	理事会	@Zoom

Gather.townについて

ポスター発表はGather.town（https://gather.town）というオンラインプラットフォーム上で実施します。会場へのアクセスに関しては、お送りしたメールをご参照ください。

Gather.townの推奨ブラウザはGoogle Chromeです。Firefoxでも問題はないようですが、**Mac OS**の**Safari**を使用するとうまく作動しないそうなのでご注意ください。専用アプリもあります（https://www.gather.town/download）。

ごく簡単にご説明すると、まずご自分のアバターを設定していただくと、バーチャル会場のなかを動き廻れます。相手のアバターに近づくと、カメラがオンになり、会話ができるようになります。チャットも可能で、こちらは相手との距離が離れていても利用できます。ポスターは会場に並べられておりますので、対面でのポスターセッションに近いかたちで発表者とやりとりができるのではないでしょうか。会場内で他の参加者との雑談も可能です。

目次へ

詳しい使用方法については、下記からリンクされているPDFをご覧ください（日本動物学会IT委員会様ご厚意により共有していただきました）

Gather.town簡易説明（日本動物学会IT委員会作成）

＊このPDFは日本動物学会大会のために作成されたものです。**4**ページに記載されている**URL**は今大会のものとは異なりますのでご注意ください。

今大会では、テレポート機能も実装しました。画面左端にあるアイコンの下から3番目、カレンダーアイコンをクリックすると、Eventsが表示されます。行きたい場所をクリックすると"Locate"と"Teleport"というボタンが表示されます。"Teleport"をクリックすると、その場所に飛ぶことができます。"Locate"をクリックすると道案内が表示されます。

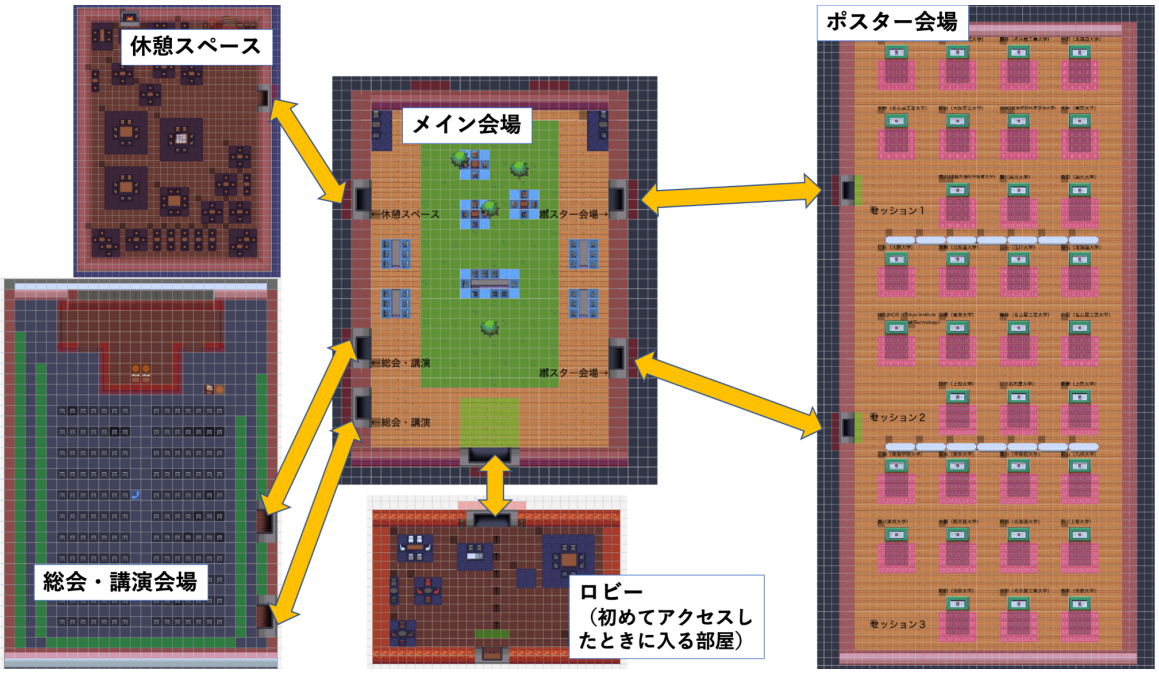
各ポスターの左横に置かれている白いものは「ホワイトボード」です。発表者と直接やりとりができないときには、こちらに質問やコメントを書き込んでいただくことができます。ただし「誰が書いたのか」は記録されません。書き込む際にはお名前も入れていただけるとありがたいです。要するに、リアルなホワイトボードと同じようなものです。

Gather. townがうまくいかない方へ

- こちらのPDFで推奨環境とよくあるトラブルを解説しています。
- こちらの掲示板で質問・相談を受け付けています（昔なつかしBBS！）

Gather 会場フロアプラン

この中をパソコンの矢印キーでぐるぐる歩き回ることになります。テレポートもできます。



目次へ

若手発表賞について

～　投票はこちらから　～

- 第1著者として発表する学生もしくは学位取得5年以内の方で、発表申込時に発表賞対象に該当すると申告された方を審査対象として、若手発表賞を設けます。
- 審査できるのは、学会に参加されている方全員です。ご覧になったそれぞれの若手発表賞対象ポスターについて、1点から10点で評価してください。
- 見ていないポスターについては回答せずに、未回答のまま送信してください。
- 大会**2**日目（**12**月**5**日）の**16:00**（ポスターセッション**3**の終了時）までに上記リンクからあなたの評点を回答して下さい。

大会運営メンバー

竹澤正哲（全体統括・雑務）
大坪庸介（プログラム・雑務）
平石界（プログラム・雑務）
大槻久（会計・雑務）
中西大輔（会員管理・雑務）
小田亮（全体統括・会員管理・雑務）
中田星矢（Gather.town設定）

目次へ

INVITED TALK

12月4日（土） 13:00-14:00

ゲノミクス時代の文化進化

松前 ひろみ 先生
（東海大学 医学部）

本発表では、ゲノム進化の立場から文化進化について議論する。ヒトのゲノム史は、過去20年のゲノム解析技術の飛躍的向上により統計的に極めて詳細な記述が可能になった。一方で、ヒトらしさを特徴づける行動・文化・社会の進化との関連は、方法論的な課題や文化進化メカニズムの複雑さが相まって、大きな謎が残っている。近年、文化進化の分野において再考されている遺伝子-文化の相互作用は、遺伝学のエビデンスが十分に蓄積されているとは言いがたい。そこで文化進化とゲノミクス研究の相乗効果の展望について参加者と議論したい。

（参考）松前先生のご研究については、下記のサイトで紹介されています。
https://www.brh.co.jp/publication/journal/102/rp/research02

招待講演のZoomリンクは、Gather.townの総会・講演会場に用意します。

目次へ

POSTERS

- ポスターはGather.town内のポスター室に掲示されています。該当のポスターに近づいてキーボードの x（エックス）を叩くとポスターが表示されます。
- 若手発表賞対象のポスターはタイトル後に☆が着いています。
- SNSでの言及が「一部可」「不可」となっているポスターがあります。大会での活発かつ忌憚ない意見交換のためにも、必ず守って下さい。

Session 1：12月4日（土）14:30 ～ 16:00

Session 1：12月4日（土）14:30 ～ 16:00

Poster 01

多数派同調は、協力の進化を促進するか**—2**つの規範が協力の進化にもたらす影響についての検討**—** ☆

貴堂雄太（北海道大学）
竹澤正哲 (北海道大学)

ヒトは社会的に学習し、行動を変容させる文化的生物である。この特性により、多様な文化差を含む大規模な協力社会が実現したという説が提唱されている（文化的集団淘汰)。このメカニズムによって協力が進化するには、集団内の行動を斉一化させ文化差を生み出す学習が必要となる。その一つに、規範の内面化がある。神の教えを信奉するように、規範への自発的な遵守を促すこの学習能力は、向社会的な規範と共進化することが先行研究において示されてきた。先の要件を満たすもう一つの学習プロセスに多数派同調が挙げられる。この学習は、協力以外のドメインにおいても適応価を持つことが知られている。そこで本研究では、協力のドメインに持ち込まれた同調バイアスが、規範内面化能力と併せ協力の進化に果たす影響を理論的に検討した。その結果、協力及び罰を是とする規範の下では、多数派同調心理は規範内面化と協力の進化に真逆の影響を与えることがわかった。

【SNSでの言及：全部可】

目次へ

Session 1：12月4日（土） 14:30 〜 16:00

Poster 02

多数派への過剰な同調: 多数派同調バイアスの実験的検討 ☆

藤川真子（広島修道大学大学院）
横田晋大 (広島修道大学)
中西大輔 (広島修道大学)

不確実性下の情報獲得状況で、多数派にバイアスをかけて同調する傾向 (e.g., 母集団において60%の個体が採用する行動を70%の確率で模倣する) を持つことが正しい判断を導くと、人類学で指摘されている。しかし、このバイアスが実在するかは明らかでない。Eriksson & Coultas (2009) は、客観的に正誤を定義できない問題を用いてこのバイアスを検討した。しかし、多数派同調バイアスの適応性が発揮される、客観的に正誤を定義できる問題 (客観問題) では検討されてない。本研究では客観問題で多数派同調バイアスが観察されるかを検討した。実験では、参加者に予備調査で抽出された各項目への正誤判断を求めた後、参加者以外の架空の9人の判断が4パタン (全員が「はい」〜全員が「いいえ」) 提示され、判断を再度求めた。実験の結果、客観問題で多数派同調バイアスが観察される仮説が部分的に支持された。

【SNSでの言及：全部可】

目次へ

Session 1：12月4日（土） 14:30 〜 16:00

Poster 03

他者は自分よりも道徳的か、それとも非道徳的か？：道徳基盤を用いた検討 ☆

藤井彩乃（名古屋工業大学）
小田亮（名古屋工業大学）

赤の他人への利他行動の至近要因として、他者一般の道徳性への期待が考えられる。そもそも、ヒトは自分と他者一般の道徳性についてどのように判断しているのだろうか。場面想定法を用いた先行研究では、回答者は同じ行動でも非道徳的な場合には自分よりも他者一般の方がより行うだろうと予想した一方で、道徳的な場合には、自分の方がより行うだろうと予想する傾向はあまり強くなかった。しかしこの研究では、想定された道徳的/非道徳的行動の内容が恣意的なものであり、その内容についてはあまり考慮されていない。そこで本研究では、想定場面の内容をHaidtらが提唱した5つの道徳基盤に対応したものとし、436人の日本人を対象に同様の調査をウェブ上で実施した。西洋文化圏に比べて自己卑下の傾向が強いとされる日本人においては、異なる結果が得られる可能性がある。また、道徳基盤によっても傾向に差が生じることが予想される。

【SNSでの言及：全部可】

目次へ

Session 1：12月4日（土） 14:30 ～ 16:00

Poster 04

コミュニケーションは言語構造の文化進化に寄与するのか？：繰り返し学習実験による検討 ☆

中田星矢（北海道大学）
大平朱莉（北海道大学）
竹澤正哲（北海道大学）

ヒトの言語は体系的な文法構造を持っている。そのため、全く同一の単語の組み合わせから構成される文章であっても、語順を並び替えることで異なる意味を表すことができる。計算論的進化言語学の分野では、言語が持つ構造は文化伝達とコミュニケーションを通して進化することを示してきた。しかし、これらの研究ではランダムな文字列の中に単純な構造が創発することは示されてきたものの、文章の意味と単語の語順に関する規則のような、現実の言語に見られる豊かな文法の創発までは扱いきれていなかった。そこで本研究では、限られた所与の単語を非規則的に組み合わせる非構造的な言語から、語順の規則を持った構造的な言語が進化しうるのかを検証する実験を行った。分析の結果、先行研究同様に、文化伝達だけではなく、コミュニケーションを行うことが構造的な言語の進化に寄与している可能性が示された。

【SNSでの言及：全部可】

目次へ

Session 1：12月4日（土） 14:30 ～ 16:00

Poster 05

説明責任は制御幻想を弱めるのか？ ☆

大野将太郎（名古屋工業大学）
小田亮（名古屋工業大学）

自己欺瞞のひとつとして、本当はランダムに決まる結果を自らが制御していると思い込む制御幻想がある。Kurzban（2012）は、自己欺瞞について心のモジュール仮説から、自己の能力を宣伝する機能と正確に事象を把握する機能が別々に働いている結果であると提唱している。本研究ではこの仮説を検証するため、自己欺瞞の一種である自己高揚効果を抑えることのできる説明責任が、制御幻想に対しても効果があるのかを実験により検討した。参加者を、自らが判断した制御感について説明する義務がある条件とない条件に分け、制御幻想が生じることが報告されている随伴性課題にウェブ上で取り組んでもらった。制御幻想が他者への宣伝として機能しているのなら、制御感について理由を説明しなければならない条件ではより客観的な判断がされ、制御幻想が弱まるだろう。実験の結果、制御幻想は生じたが、説明責任条件において有意に低下することはなかった。

【SNSでの言及：全部可】

目次へ

Session 1：12月4日（土） 14:30 ～ 16:00

Poster 06

直観的協力の生起メカニズムに関する検討：安心ゲームへの主観的な構造変換は集団内に限定されるか？（研究計画） ☆

前田 楓（大阪市立大学都市文化研究センター，日本学術振興会（DC2），安田女子大学大学院）
橋本博文（大阪市立大学大学院）
谷田林士（大正大学）

人々が示す直観的協力に関する先行研究（e.g., Rand, et al., 2012）を踏まえつつ、直観的意思決定に基づく協力行動は内集団成員に限定的に働く可能性を検討する実験を現在計画している。具体的には、最小条件集団を用いて集団所属性を操作すると同時に、一回限りの囚人のジレンマゲーム（PDG）を時間制限のある状況下で参加者に行わせ、直観的協力が内集団成員を相手とする場合に顕著に示されるか否かをまず検討する。加えて、内集団成員に対する直観的協力はPDGが安心ゲームへと主観的に構造変換されるために生じるとする仮説を検討するため、直観的協力へと至る参加者の意思決定時間（より短いと予測）と結果に対する望ましさ評定値（相互協力に対する選好をより示すと予測）、さらに、直観的協力に至るまでの情報探索過程（相互協力と相手の利得に対する注視時間が長くなると予測）を適切なかたちで分析することも試みる。

【SNSでの言及：全部可】

目次へ

Session 1：12月4日（土） 14:30 ～ 16:00

Poster 07

意図の伝達を考慮した義憤の適応性（研究計画） ☆

清水あおぐ（北陸先端科学技術大学院大学）
橋本敬(北陸先端科学技術大学院大学)

規範違反への応答として違反者に罰を与える行動は広く文化を超えて観察されており(Henrich et al, 2006)、オンライン上では義憤の表出という仕方で規範違反者に対して多くの非難がなされている(Crockett, 2017)。ここで義憤とは怒りと嫌悪感から構成される感情である(Salerno & Peter-Hagene, 2013)。規範違反者に罰を与えることは利得を下げることによって協力行動を促しグループ全体の利得を増加させることができる一方、義憤の表出は利得を下げるわけではない。しかし、公共財ゲームでは非難された参加者が後のラウンドでより貢献する傾向が見られている(Barr, 2001)。研究計画では義憤の表出によって行動が望ましくないという意図を伝達するという側面に焦点を当て、第三者の義憤・罰を独立変数とし、第三者義憤・罰ゲームにおける寄付額の差について検証する。

【SNSでの言及：不可】

目次へ

Session 1：12月4日（土） 14:30 ～ 16:00

Poster 08

加害意図がなければコストのかからない謝罪でも赦してもらえるのか？

大坪庸介（東京大学大学院人文社会系研究科）
樋口美佑（神戸大学文学部）

謝罪の機能は加害者がさらなる加害意図がないことを被害者に伝達することであり、謝罪にコストをかけて関係を重視している程度を示すことで被害者は誠意を感じとる。そして、被害者による誠意の知覚が赦しを導くと考えられる。しかし、加害行為に意図がなかったことが自明であれば、謝罪コストの有無によらず被害者は加害者を赦すかもしれない。本研究では、場面想定法により加害意図がないことが自明な場合、意図があることが自明な場合、意図の有無が曖昧な場合のシナリオを用いて、謝罪コストが誠意の知覚、赦しを上昇させるかどうかを検討した（3×2の参加者間要因配置実験）。その結果、謝罪コストは加害意図の有無・曖昧さによらず誠意の知覚、赦しを上昇させた。また、コストのかかる謝罪が誠意を促し、それが赦しにつながるというモデルの前提と一貫して、誠意の知覚に対するコストの効果量は赦しに対する効果量よりも大きかった。

【SNSでの言及：全部可】

目次へ

Session 1：12月4日（土） 14:30 ～ 16:00

Poster 09

大きいグループにおける協力行動の存在は**opt out**で説明可能である

黒川瞬（北陸先端科学技術大学院大学）

自分の適応度を下げて相手の適応度を上げる行動を協力行動と本発表では呼ぶことにする。このとき、協力は自分の適応度を下げる行動であるため、その存在は説明を要する。「協力者とは関係を続けるが非協力者とは関係を打ち切る」という行動を個体がとる場合（以下、opt outと呼ぶことにする）、協力者は協力者と出会いやすくなり、その結果、協力は進化しうる。いま、ヒトは大きいグループにおいても協力をする。大きいグループにおける協力の存在は説明困難であると一般的には考えられてきた。大きいグループにおける協力の存在はopt outで説明可能だろうか？私はこの問いに対してn人囚人のジレンマの解析により取り組んだ。その結果、財が、1個体が得られるベネフィットがグループサイズに依存しない性質を持つ場合は、大きいグループにおける協力をopt outで説明できることを明らかにした。

【SNSでの言及：全部可】

目次へ

Session 1：12月4日（土） 14:30 ～ 16:00

Poster 10

新奇物への探索傾向は見知らぬ他者との社会関係構築を予測するか？：ラットにおける探索的分析

勝 野吏子（東京大学）
博多屋汐美（東京大学）
外谷弦太（東京大学）
岡ノ谷一夫（東京大学）

ヒトに特徴的な新奇物への恐怖低下とそれに伴う探索傾向の増大は、他者との関係構築にどのような影響を及ぼすのか。群居性で高い向社会性を示すラット（ドブネズミ）もまた、ヒトとの共生や家畜化を経て新奇物探索傾向を増大させた種である。本研究ではメスのSDラット（N=18）を対象に、個体の行動特性と集団内の社会的相互作用との関連について、探索的な分析を行った。実験ではまず、活動性、不安様行動、新奇物探索、社会性を計測する行動特性テストを実施した。主成分分析の結果、第1主成分は新奇物探索テストの項目の負荷量が大きく、新奇探索傾向を示すと解釈した。その後、2ペアを合流させた互いに既知・未知の4個体で飼育して社会的相互作用を調べると、新奇物探索傾向が、集団飼育開始初日における孤立時間と相関する傾向がみられた。今後、接近や毛づくろいといった動的な指標も追加し、新奇物探索傾向と向社会性との関連を検討する。

【SNSでの言及：全部可】

目次へ

Session 1：12月4日（日） 14:30 ～ 16:00

Poster 11

恋愛・結婚・出生・子育ての四段階と少子化：現代日本における結婚の意義に注目した二次分析（研究計画）

森田理仁（東京大・理・生物・進化人類）
徳増雄大（東京大・理・生物・進化人類）

一見すると進化的に非適応的な現象である少子化の要因としては，未婚率の上昇と夫婦出生率の低下の双方が指摘されている．特に日本では婚外子が非常に少ないため，結婚という過程は重要である．また，近年では親や社会が結婚に関与する度合いが少なくなっており，恋愛や婚活を考慮する必要がある．さらに，子の質を高めるという点で子育ても無視できない．よって，恋愛や婚活から結婚，出生（出産），子育てに至る一連の過程全体を段階的に分析することが求められる．本発表では，明治安田総合研究所『2016年 結婚・出産に関する調査』の個票データを用いた二次分析の計画を示す．「恋愛や婚活に対する積極性が高いほど，結婚年齢が若く，子の数が多い」「子育てに関するサポートが少なく，また，コスト感が大きいほど，子の数が少ない」「結婚年齢は，子育てと子の数の関連を媒介する」といった仮説の妥当性や，適当な統計解析の手法について議論したい．

【SNSでの言及：全部可】

目次へ

Session 2：12月5日（日）13:00 ～ 14:30

Session 2：12月5日（日）13:00 ～ 14:30

Poster 12

サイコパシーの協力は互恵性の期待で引き起こされるか？ ☆

仁科国之（大阪大学人間科学研究科）
横田晋大（広島修道大学）

サイコパス傾向が高い人は他者に対して利己的に振る舞うが、特定の状況下（公的な場面や友人相手）では協力する。これらの状況には互恵性の期待が含まれていると考えられる。そこで、本研究では、国と県というカテゴリーを用いてサイコパス傾向の高い人が互恵性の期待に基づいて協力的になるかを検討した。場面想定法を用いて援助行動を測定し、その際に所属集団の知識の操作にて互恵性の期待を操作した。その結果、国か県かにかかわらず、サイコパス傾向の高い人は互恵性を期待できる条件では、互恵性を期待できない条件よりも協力的に振舞っていた。協力行動の期待に関しても国か県に関わらず相互条件の方が他の条件よりも協力行動の期待が高かった。これらの結果は、サイコパス傾向の高い人は、カテゴリーに関わらず、互恵性が期待出来る相手には利他的に振る舞うことを示唆している。

【SNSでの言及：不可】

目次へ

Session 2：12月5日（日） 13:00 〜 14:30

Poster 13

脳の中に「自他の重ね合わせ」は存在するか：哲学と認知神経科学の学際的アプローチ

☆

本間祥吾（北海道大学文学院）
山縣豊樹（北海道大学文学研究科）
小川健二（北海道大学文学研究院、社会科学実験研究センター、人間知×脳×AI研究教育センター）
田口茂（北海道大学文学研究院、人間知×脳×AI研究教育センター）
竹澤正哲（北海道大学文学研究院、社会科学実験研究センター、人間知×脳×AI研究教育センター）

我々は自身が「自己」を持つ存在であり、他者も「自己」を持つ存在であることを理解している。しかし、我々は自らの自己しか経験できないにもかかわらず、どのようにして他者も自己ある存在であると知るのだろうか（哲学における「他我問題」）。現象学では、自他の表象が距離なく重なり合うような現象がこの認識の基盤にあることが議論されている（e.g., Taguchi, 2018）。本研究はfMRIのデコーディング分析によって、この「自他の重ね合わせ」が個人の脳に見られるかを検討した。実験では参加者は3つの視点（自己・他者・俯瞰）を想像しながら動画を見た。この脳活動から3視点を識別するデコーダーを作成し、別の漫然と動画を見ている時の脳活動を分類した。「自他の重ね合わせ」が存在するなら、どの視点にも分類できない状態であると予測される。発表では得られた結果を報告し、自他分離の進化・発達プロセスについて議論する。

【SNSでの言及：不可】

目次へ

Session 2：12月5日（日） 13:00 ～ 14:30

Poster 14

向社会行動における背外側前頭前野の役割：思春期世代を対象にした検討 ☆

山田順子（玉川大学）
寿秋露（玉川大学）
宮崎淳（早稲田大学）
松田哲也（玉川大学）
高岸治人（玉川大学）

成人を対象にした先行研究は、背外側前頭前野（DLPFC）の皮質が厚く、灰白質体積が大きい人ほど経済ゲームにおける向社会性が低いことを明らかにした。しかし、成人で見られたDLPFCと向社会行動との関連が子どもでも見られるのかについてはこれまで十分な研究がされておらず議論が続いている。そこで本研究は10歳から18歳までの子どもを対象に、向社会性を測定する複数の経済ゲームにおける向社会行動と脳構造の関連を検討した。VBMを用いた全脳解析の結果、右DLPFCの体積が大きい子どもほど、独裁者ゲームおよび公共財ゲームにおける向社会性が高いことが明らかになった。また全脳解析では有意ではないものの、囚人のジレンマゲームや信頼ゲームにおいても同様のパタンが見られた。以上の結果は、成人における先行研究とは異なるパタンである。本発表では成人の結果との比較を通じ向社会行動におけるDLPFCの役割について議論する。

【SNSでの言及：不可】

目次へ

Session 2：12月5日（日） 13:00 ～ 14:30

Poster 15

AllCの存在は、普遍主義均衡・集団主義均衡の安定性に影響を与えるのか？ ☆

舘石和香葉（北海道大学・日本学術振興会）
高橋伸幸（北海道大学）

閉ざされた社会から開かれた社会への移行可能性を検討することは重要である。Matsuo et al., (2014) の数理モデルでは、集団を越えて協力する普遍主義戦略・内集団にのみ協力する集団主義戦略はそれぞれ均衡を形成するが、AllDが侵入し協力状態が崩壊することが示されている。ただし、Matsuo et al., (2014) は、AllCの存在を仮定しておらず、AllCの侵入による協力状態への影響は検討されていない。そこで、本研究はMatsuo et al.のモデルにAllCを追加し、4戦略の場合での進化ダイナミクスを数理解析で検討した。解析の結果、3戦略時には他戦略に対し頑健だった普遍主義均衡にAllCが侵入し、そこからAllDが侵入することから、AllCが存在することで、集団主義均衡、普遍主義均衡の安定性が低下することが示唆された。

【SNSでの言及：不可】

目次へ

Session 2：12月5日（日）13:00 ～ 14:30

Poster 16

The evolution of cooperation in the generalized linear division of labor ☆

NIRJHOR MD SAMS AFIF（Tokyo Institute of Technology）
NAKAMARU MAYUKO (Tokyo Institute of Technology)

We analyze the effects of sanction systems (first-role sanction system and defector sanction system) in the evolution of cooperation in a generalized model of linear division of labor, where there are n roles ($n \in N$ and $n \geq 2$). We find that, the first-role sanction system is more effective and if the negative effect to all by defection gets large enough, the cooperation is more evolved.

【SNSでの言及：全部可】

目次へ

Session 2：12月5日（日） 13:00 ～ 14:30

Poster 17

ネットワーク上の文化伝達モデルによる日本語アクセント様式の変異率・系統関係の推定（研究計画）☆

高橋拓也（東京大学・日本学術振興会特別研究員）
小野原彩香（東京大学・日本学術振興会特別研究員）
井原泰雄（東京大学）

日本語方言アクセントは核とトーンの有無の組合せに注目するだけでも複雑な地理的分布を示す。平安末期の類聚名義抄には、核とトーンのあるアクセントが記載されている。そのアクセントと、青森、鹿児島など地理的に大きく離れた場所の現在のアクセント様式との間に型の対応関係があるため、琉球を除く日本各地のアクセントは一つの祖先型に収束すると考えられている。本研究ではアクセント地図を元に抽出した100地点におけるアクセントをデータとして、核・トーンの消失率やアクセントの空間的な伝達率をベイズ推定する。このために日本本土をメッシュ状に区切ったネットワークを用いてアクセントの地理的伝播をシミュレートすることで、集団遺伝学における合祖理論と系統樹に対するベイズ推定の枠組みを合わせた手法を用いる。さらに本土アクセントの分岐年代や、琉球各地のアクセントが核及びトーンアクセントのいずれに該当するかをベイズ推定する。

【SNSでの言及：全部可】

目次へ

Session 2：12月5日（日） 13:00 ～ 14:30

Poster 18

文化的自己観は性格特性の自己高揚/卑下に影響するか？：プライミングによる検討 ☆

横井悠真（名古屋工業大学 工学部 情報工学科）
小田亮（名古屋工大）

日本人学生では誠実性と調和性に自己高揚がみられたという先行研究を受けて、より広い年齢層の日本人を対象にBig Five性格特性について回答者自身と他者一般のそれぞれについて評価してもらい、それらを比較した調査では、先行研究とは異なりどの性格特性にも自己高揚はみられなかった。また開放性、誠実性と外向性の自己卑下の個人差には、相互協調的自己観よりも相互独立的自己観の強さの方が関連していた。本研究では、性格特性の自他の差をより分かりやすくするために、回答者自身と他者一般を単一の尺度で直接比較してもらった。また性格特性の自己高揚/卑下と文化的自己観の因果関係を検証するために、相互独立と相互協調をプライミングすることで文化的自己観の影響を評価した。もし誠実性と調和性の自己高揚が相互協調的な日本文化への適応であるなら、相互協調プライミングをされた回答者においてより強い自己高揚がみられると予想される。

【SNSでの言及：全部可】

目次へ

Session 2：12月5日（日） 13:00 ～ 14:30

Poster 19

文化的自己観は性格特性の自己高揚/卑下に影響するか？：個人差による検討

小田 亮（名古屋工業大学）

相互協調的自己観をもつ東アジア人においては、自己を高揚しようとする動機が無いといわれてきた。しかし、日本人学生を対象に、Big Five性格特性について自身と平均的な学生を比較してもらった先行研究では、調和性と誠実性については自己高揚がみられ、その理由として、日本のような相互協調的自己観が優勢な文化においては、これらの性格特性が有利に働くのではないかという文化ゲームプレイヤー的観点からの考察がなされている。本研究では、より広い年齢層を対象にこれを追試し、また自己高揚の程度と相互独立・協調的自己観尺度の得点との関連について分析した。その結果、先行研究とは異なりどの性格特性についても自己高揚はみられなかった一方で、開放性、外向性と神経質傾向には自己卑下がみられた。また、開放性、誠実性と外向性について、各回答者の自己卑下の強さには相互協調的自己観よりも相互独立的自己観の方が関連していた。

【SNSでの言及：全部可】

目次へ

Session 2：12月5日（日） 13:00 ～ 14:30

Poster 20

集団選択と社会選択の相互作用による利他性の進化

田中嘉成（上智大学地球環境学研究科）

協力行動もしくは利他性の進化は進化生物学や社会生物学の主要なテーマとして研究されてきた。本研究では、同種に属する他個体の特定形質に応じて、他個体の適応度に影響を与える社会選択と、群れ生活する生物がグループを単位として淘汰にさらされるグループ選択を統合した「統合的社会選択モデル」を考案し、量的遺伝モデルによる定式化と数値シミュレーションを行った。集団の利益のために自己を犠牲にする特性を向社会性（利他性）とよび、集団内における社会選択で他個体から選好される形質とみなした。解析結果は、社会選択のみでも、グループ選択のみでも向社会性の進化は予測されず、2つの選択圧が相互作用により向社会性の進化がもたらされること、集団内の向社会性が集団の存続性に対して非線形な寄与をする場合、向社会性が進化的に安定となることが示唆された。

【SNSでの言及：全部可】

目次へ

Session 2：12月5日（日） 13:00 ～ 14:30

Poster 21

罰行使者はいつ好かれるか？非協力者の動機とゲーム状況に関する検討

Li Yang（名古屋大学）
三船恒裕（高知工科大学）

非協力者への罰は見知らぬ他者への協力行動の進化的メカニズムの有力候補である。この罰行動は、罰行動をした個体が良い評判を得る場合に進化可能となりうる。しかし、罰行使者への評判に関する先行研究は結論が一貫しない。筆者らは非協力行動の動機が罰行動に与える影響を検討するため、オンライン仮想実験を実施した。実験では公共財ゲーム（PGG）または囚人のジレンマゲーム（PDG）の状況を提示した。ゲームでは一人のプレーヤーが非協力者であり、それを罰した罰行使者と罰さなかった傍観者それぞれに対して、参加者が評価を行った。非協力行動の動機は、意思決定を行った順番（同時決定／順次決定の最初／順次決定の最後）によって操作した。結果、PGGでは罰行使者が非罰行使者より低く評価され、PDGでは逆に罰行使者が高く評価されるという先行研究と一貫した結果を得た。しかし、非協力行動の順番の効果は見られなかった。

【SNSでの言及：全部可】

目次へ

Session 2：12月5日（日） 13:00 ～ 14:30

Poster 22

イヌやネコはヒトの子どもをどのように認識しているのか？質問紙調査による検討（研究計画）

齋藤慈子（上智大学）
井上舞（ロイヤルカナンジャポン）
都築茉奈（アニコム損害保険株式会社）
向井田真衣（東北大学）
荒堀みのり（京都大学, アニコム先進医療研究所株式会社）

通常ペットであるイヌやネコはヒトが世話をする対象であるが、同じくヒトの大人から世話を受ける対象であるヒトの子どもを、ペットはどのように認識しているのであろうか。このような検討は、幼型図式の普遍性についての考察や、ペットとヒトの子ども双方のリスク・ストレス軽減のために重要な情報を提供すると考えられる。これまでに得られた質的なアンケート調査の結果からは、保護者が評定したペットの子どもに対する感情や反応は個体によって様々であること、子どもの発達に伴い、関係性が変化することがあることなどがわかった。本研究では、その結果を受けて、質問紙を作成し、イヌまたはネコを子どもが生まれる前から飼育しており、0-6 歳の子どもがいる保護者を対象に、Webアンケート調査を実施し、一般的な傾向をさぐる。子どもの年齢ごとに、ペットおよび子どもの行動や保護者からの印象が異なっているかを、イヌとネコ分けて分析する。

【SNSでの言及：不可】

目次へ

Session 3：12月5日（日） 14:30 ～ 16:00

Session 3：12月5日（日） 14:30 ～ 16:00

Poster 23

COVID-19ワクチン接種の促進・阻害要因 **-**第**5**波下におけるデータからの検討**-** ☆

工藤大介（東海学院大学）
岩井勇樹（東海学院大学）
李楊（名古屋大学）

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的流行下において，そのワクチンの開発が進み，一部の国では接種が進んでいる。日本においても，2021年2月17日に医療関係者への接種が始まり，同年4月12日から65歳以上の高齢者に対する接種が，続いて一般接種が開始・進行している（厚生労働省, 2021）。ワクチン接種はCOVID-19の流行を抑制する一手となりうるが，ワクチンに対するネガティブな態度はこれまでの他のワクチン（e.g., インフルエンザ）と同様に散見されている。例えば，IPSOS（2020）の国際的な調査によると，日本はロシアやフランスに次いで，調査参加国の中で忌避的態度が4番目の高さであった。このような忌避的な態度がなぜ生じるのかと共に，一般へのワクチン接種が急速に進んでいるのはなぜか，二重過程理論とリスク認知，その関連諸要因を元に，感染急増第5波下のデータから検討を行った。

【SNSでの言及：不可】

目次へ

Session 3：12月5日（日） 14:30 ～ 16:00

Poster 24

若年成人期のリスク傾向と中年期の社会的成功との関係：生活史理論の前提の再検討

☆

坂本遼太郎（東京大学文学部人文学科社会心理学専修課程）
米谷充史（神戸大学大学院人文学研究科）
大坪庸介（東京大学大学院人文社会系研究科）

生活史戦略研究は、幼少期の社会経済的地位（SES）の低さと成長後の衝動性の関連性を、逆境への適応的な戦略とみなしているが、米谷・大坪（2020年HBES-J大会）では、むしろ幼少期SESが高かった群で、衝動性が年収、生活満足度を上昇させることが示唆された。男性に限定した分析でも、世帯年収・人生満足度に対する幼少期SESと衝動性の交互作用が有意傾向・有意であった。今回、この知見を再現する目的で、全国1051人の40~45歳男性を対象にオンライン調査を行った。その結果、米谷・大坪の結果は再現されず、幼少期または若年成人期SESの主効果が有意であり、衝動性と幼少期SESの交互作用は見られなかった。また、世帯年収で衝動性の主効果が認められた。これらの結果は、幼少期SESの高い人が中年期の世帯年収や人生満足度も高く、衝動性（リスク行動をする程度）により中年期の世帯収入が上昇する可能性を示唆している。

【SNSでの言及：不可】

目次へ

Session 3：12月5日（日） 14:30 ～ 16:00

Poster 25

出生体重が初経年齢に及ぼす影響：ストレス応答性を考慮して ☆

瀧川諒子（早稲田大学文学研究科）
福川康之（早稲田大学）

これまで，1) 母胎内におけるストレスが出生体重に影響すること，2) 女性が思春期前に経験したストレスが初経年齢に影響することが指摘されている．しかし，ストレスに対する鋭敏性であるストレス応答性の個人差に配慮した研究はこれまで十分行われてこなかった．そこで本研究は，女児の出生体重と初経年齢との関連における，ストレス応答性の影響について検討した．アメリカ人女性84名を対象とした調査データを分析した結果，ストレス応答性の高い女性は，出生体重が軽いほど初経年齢が遅いことが明らかとなった．本研究の結果は，1) 母胎内におけるストレスが出生体重を規定するだけでなく，思春期における発育（初経年齢）にも影響すること，2) 発育へのストレスの影響にはストレス応答性が関与することを示唆するものである．ヒト女性の生活史上の繁殖戦略として，誕生前の胎内環境に応じた初経年齢の調節作用があるといえるかもしれない．

【SNSでの言及：不可】

目次へ

Session 3：12月5日（日） 14:30 ～ 16:00

Poster 26

睡眠不足が創造性に与える影響の検討 ☆

岩山俊裕（九州大学大学院統合新領域学府）
梶原真優（九州大学大学院統合新領域学府）
上田珠生（九州大学芸術工学部）
元村祐貴（九州大学大学院芸術工学研究院）

睡眠は学習、記憶において重要な役割を果たしている。創造性においては、睡眠が良い影響を及ぼす報告がある一方で、睡眠不足が良い影響を及ぼす等の矛盾した報告がされている。このように、睡眠不足と創造性の関係には未知の部分が多くあると考えられる。本研究では創造性を問題への新しい解答を生み出す能力と定義し、睡眠不足がタングラム課題を用いた創造性に及ぼす影響を検討することとした。若年男性27名を対象とし、睡眠群(8時間睡眠)と断眠群(2時間睡眠)に分けた。実験は2日間にわたって行われ、実験参加者は1日目に主観的および客観的眠気を測るための課題、創造性課題に取り組んだ。1日目の夜、各群の実験参加者は睡眠統制に従って睡眠をとった。2日目、実験参加者は1日目と同様に課題に取り組んだ。分散分析の結果、主観的眠気と客観的眠気は断眠により有意に増加したが、創造性に関しては断眠群と睡眠群で有意な差が見られなかった。

【SNSでの言及：全部可】

目次へ

Session 3：12月5日（日） 14:30 ～ 16:00

Poster 27

新たなシグナルが人間社会に普及する過程の実証的検討-飲食店の新型コロナ対策ステッカー制度を例にとって- ☆

森隆太郎（東京大学）
亀田達也（東京大学）

他者の「見えるもの」を用いて「見えないが知りたいもの」を推論したり、また逆に他者から推論されるために「見せよう」としたりすることは、人間集団における社会の成立に不可欠な相互作用である。
本研究は、コロナ禍における飲食店舗の感染症対策という喫緊の「見えないが知りたいもの」に関して、茨城県が対策ステッカー制度という「見せるもの」を導入した事例に着目する。第一に、新たに「知りたく」なった質や、新たに「見える」ようになった手がかりが、集団にどのような動学を生むかについて図式的に整理し、手がかりの情報価の変化に注目したモデルが、その普及について、多数派への同調や単純な接触に基づく普及モデルと異なる予測を生むことを明らかにした。第二に、情報価モデルに基づく予測の妥当性を、茨城県のコロナ対策ステッカー制度の実データを用いて検証した。

【SNSでの言及：全部可】

目次へ

Session 3：12月5日（日） 14:30 ～ 16:00

Poster 28

罰権力集中が協力形成に及ぼす負の効果の検討

大薗博記（鹿児島大学）
仲間大輔（リクルートマネジメントソリューションズ）

公共財ゲーム（PGG）研究の中で「罰権力の集中」が協力形成に及ぼす影響が検討されてきたが、効率的な罰につながることを示す研究がある一方、協力が達成されにくくなることを示す研究もあり、結果は一貫しない。本実験では、罰権力の所在が事前知識となっているかが境界条件となることを示すことを目的とした。4人でのPGGの後で1人の罰権力者が他成員を罰するという流れを繰り返す実験の結果、PGGの前に誰が罰権力者であるかが知らされる条件では、罰権力者の協力度が他成員より下がることがわかった。また、そうした知識なしにPGGを行う条件と比べ、反社会罰（自分より協力的な成員への罰）が多く生起することも明らかとなった。さらに、罰権力者が非協力的であるほど、他成員の次期での協力度が下がるという負の波及効果が生じることもわかった。こうした結果は、罰権力者が常に固定されている場合でも、毎回異なる場合でも同様であった。

【SNSでの言及：全部可】

目次へ

Session 3：12月5日（日） 14:30 ～ 16:00

Poster 29

集団に有益な戦略の文化進化：文化的集団淘汰の実験的検討

阿部紗采（北海道大学）
土田修平（北海道大学）
竹澤正哲（北海道大学）

ヒトに見られる大規模な協力行動がなぜ進化したのかという問いに対し、文化的集団淘汰（CGS）による説明が提唱されている。CGSとは、複数均衡状態に至った集団において、集団間競争と総称されるプロセスが駆動すると、集団に有益な文化形質が社会全体に拡散するという理論である。CGSの代表的な数理モデルでは、集団間競争として主に致死的な戦争が想定されていたため、CGSに関する誤った認識が広まった。しかし集団間競争には、利得に基づく選択的模倣や選択的移住も含まれ、これらのプロセスが集団に有益な戦略の拡散を促進することは、数理モデルや現実世界の数多くの事例によって示されている。そこで本研究は、集団間競争として利得に基づく選択的模倣のみが可能な状況において、集団に有益な戦略が拡散することを実験によって検証した。実験の結果、利得に基づく選択的模倣によって集団に有益な戦略の進化が促進されることが示唆された。

【SNSでの言及：全部可】

目次へ

Session 3：12月5日（日） 14:30 ～ 16:00

Poster 30

自己統制資源の消耗が向社会的・向自己的な人の利他行動に及ぼす影響

石佳月（上智大学 総合人間科学研究科心理学専攻）
井上裕香子（高知工科大学）
齋藤慈子（上智大学）

人々がコストをかけて利他的に振る舞うこと、その程度に個人差があることは社会的価値志向性(SVO)によって説明されてきた。利他行動を行うには、衝動性による利己的行動を抑制するため、有限な自己統制資源が消耗されると指摘されている。異なるタイプのSVOを持つ人たちは、利他行動の意思決定のプロセスに差異が存在するとされているが、自己統制資源の消耗が異なるタイプのSVOを持つ人たちそれぞれの意思決定にどのような影響を及ぼすかに関しては十分明らかになっていない。本研究では、向社会的と向自己的の2種類の人々が、ストループ課題によって自己統制資源が消耗された際に、どの程度利他行動をとるかを独裁者ゲームを用いて検討した。大学生・大学院生50人を対象としたところ、SVOの主効果は見られたが、消耗の有無とSVOの交互作用は見られなかった。今後は、自己統制資源を消耗する手法の妥当性について再検討する必要がある。

【SNSでの言及：不可】

目次へ

Session 3：12月5日（日） 14:30 ～ 16:00

Poster 31

初期ヒト集団の「法の機能と進化史」：コンピュータ・シミュレーションによる解明（研究計画）

和田幹彦（法政大学）
高橋拓也（学振特別研究員PD）

我々人間社会の「法」は、初期ヒト集団でどのような機能を持って、その後どのように発展・進化した進化史を持つのか、という進化生物学・特に近年研究の進む「文化進化論」の学術的問いをcomputer simulation (CS) を駆使して解明を試みる。CSには、進化言語学の最新知見に基づき「約50万年前に言語が出現し、法の規範及びその強化のための第3者罰の基準の共有が精緻化した」ことも組み込む。約700万年前にチンパンジーとの共通な祖先から別れた後、更新世の200万年前に入り、Homo属は、原人(ホモ・エレクトス等)→旧人(ネアンデルタール人)→新人(ホモ・サピエンス)へと進化した。この間の法の「機能」と「進化史」の解明は重要な学問的空白である。法社会学者ではLuhmann(1993)が法の文化進化の基礎を固めており、太田勝造も2003年以後提言する進化のCSでこの問いを解明する。

【SNSでの言及：不可】

目次へ

Session 3：12月5日（日） 14:30 ～ 16:00

Poster 32

同情の強さと返報可能性の手がかり：助けるに値するのは誰か？（研究計画）

小田亮（名古屋工業大学大学院工学研究科）

本研究の目的は、同情（compassion）の機能を明らかにすることである。Compassionとは、「他人の苦しみを目の当たりにしたときに生じる感情であり、その後、助けたいと思う動機となるもの」と定義されている。互恵的利他主義の理論から、同情には、自分の援助に対する相手のお返しの程度を無意識に指標化する機能があるのではないかと考えられる。本研究では想定場面を用い、返報可能性の手がかりとして、援助対象が困難に陥った原因（自責/他責）と、パーソナリティ（利他的/普通）を考慮する。まず、自分の責任ではない原因によって苦境に陥った人は、そうでない人よりも同情され、より助けたいと思われると予想される。また、利他的な行動傾向のある人は、そうでない人よりもより同情され、より助けたいと思われると予想される。さらに、原因が自分の責任かどうかと、本人の利他性とのあいだには交互作用があると予想される。

【SNSでの言及：不可】

目次へ

Session 3：12月5日（日） 14:30 ～ 16:00

Poster 33

フィールドでの遺伝子サンプリングのための予備調査**—Serial monogamy**がみられるボツワナの母系居住集団を対象に**—(**研究計画**)**

寺本理紗（京都大学大学院アフリカ地域研究専攻）

ボツワナのKgatla集団では、女性が生殖パートナーを増やすこと(以下、配偶成功)が繁殖成功を高めることに繋がっており、女性にも男性同様に性淘汰の影響が作用している可能性が示唆されている(寺本,2021)。しかし、女性の配偶成功と繁殖成功が正の勾配をもつメカニズムの背景には、女性がパートナーを増やす度になんらかのベネフィットを得ていることが予測されるが、それが(a)直接的なものか(男性から物質的資源の獲得)、(b)間接的なもの(遺伝的)かはこの集団では特定できていない。
そこで本研究計画では、上記の(1)と(2)を差異化し、女性の繁殖成功に対するそれぞれの影響を総合的に評価する研究計画の構築を目指した。
具体的には、牧畜民ヒンバでの遺伝調査(Scelza et al,2020)を元に、発表者が2022年度にボツワナでおこなう個人レベルでの遺伝情報の収集計画を発表する。

【SNSでの言及：全部可】

目次へ